【歴史エッセイ】

東眺西望

陳舜臣

chin shun shin

中国歴史シリーズ

東眺西望（とうちょうせいぼう） 歴史エッセイ
陳舜臣（ちんしゅんしん）
© Chin Shun Shin 1991

1991年10月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3509
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185002-4

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社文庫

東晩西望

歴史エッセイ

陳舜臣

講談社

目次

光は東より――「アジア」の大航海時代　七
問われる意義――第二次世界大戦と現代　三
茶は世界を変える――アメリカの独立と茶　三六
人類のはてしない歩み――「歴史」以前の重み　五一
無尽蔵の宝庫――「遺丘」と粘土板文字　六六
栄光のはじまりと継承――ギリシア・ローマからイスラムへ　八一
あやしい魅力――インド史の底流　九五
点と点とのあいだ――古代中国史の謎　一一〇
タシュクルガン・アラムート――二つのイスマイル派　一三五
ふしぎなデュエット――ヨーロッパの光と影　一四〇
分裂と断絶の奥――「大唐の春」前史　一五五
東と西を結ぶ糸――ビザンツとモンゴルを継ぐ　一七〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

草原の嵐——遊牧と定住のドラマ　一八五
歳幣の役割——文明の落差を埋める　二〇一
南海への道——中国文献に見る東南アジア　二一七
近代ヨーロッパとアジア——風説書虚報の背景　二三三
アジアの解放——アジア思春期の二巨人　二四八
事件と情報伝達——アヘン戦争と日本の開国　二六三
エーゲ海の東と西——帝国主義時代の民族意識　二七八
歴史の節目——現代史を生きる　二九三

初版あとがき　陳舜臣　三〇七
文庫版あとがき　陳舜臣　三一一

写真・陳立人
写真レイアウト・陳幼芳

東眺西望

歴史エッセイ

光は東より――「アジア」の大航海時代

イスラムとイベリア半島

十五世紀末のアメリカの発見と、喜望峰を経由する東インドへの航路の発見は、アダム・スミスによれば、人類史上もっとも偉大でもっとも重要な事件であるという。アメリカ大陸にはすでに住民がいたのだから「発見」という表現は、いかにもヨーロッパ中心といわねばならない。だが、この二つの事件の重要性は、いくら強調しても、しすぎることはないだろう。アジア、アフリカ、アメリカが、ヨーロッパと結びつき、それぞれの住民が「世界」だとおもっていたもののほかに、別の世界が存在することを知った。

この大航海時代の幕をあけたのは、イベリア半島の国――スペインとポルトガルであり、ヴァスコ・ダ・ガマがインドで、「キリスト教徒と香料をもとめて来た」と発言したように、彼らを

促したものは物心両面のエネルギーであったといえよう。

だが、大航海時代には前史がある。さかのぼれば、きりがないかもしれないが、十五世紀初頭、明の鄭和の西アジア、アフリカへの大航海は見すごされてはならないだろう。喜望峰航路発見の九十余年前に、鄭和の航海がはじまり、その最後の第七次航海は宣徳六年（一四三二）出発、同八年（一四三三）帰国である。鄭和の最後の航海からかぞえると、六十余年であり、あるいは前史というより、大航海時代史に編入されうるかもしれない。

イベリア半島は八世紀前半に、イスラム帝国の版図にはいり、長いあいだイスラム文化圏であった。イスラム帝国（ヨーロッパではサラセンと呼ばれることが多い）がイベリア半島で分裂しはじめたのは、モンゴルの西征以前だが、小君主国の支配力は十五世紀にまで及んでいた。キリスト教徒による国土回復がようやくなり、新世界への進出はその余勢をかったという見方もある。だからこそ、彼らの進出は、キリスト教の信仰をひろめるという十字軍的な性格を濃厚に帯びていたのであろう。しかし、見方をかえると、八百年にわたるイスラム支配の下にあったイベリア半島のキリスト教徒は、長いあいだ「別の世界」になじんでいたことになり、喜望峰をまわってインドへ行っても、そこに住んでいる異教徒とのつき合い方を知っていたともいえる。アメリカはたしかに彼らにとって新世界であるが、東インドはかならずしもそうでなかった。そこで彼らが商売仇として火花を散らしたのは、彼らもなじみの深いイスラム商人だったのである。

鄭和の大遠征

ヴァスコ・ダ・ガマが砲撃して陥したインドのカリカットは、鄭和が第一次航海から、かならず寄港した古里にほかならない。ここで鄭和が雲南生まれの中国人であるが、イスラム教徒であったという事実が想起される。彼の父親の墓が発見され、その墓誌によれば姓は馬、字は哈只とある。鄭という姓は、鄭和が成祖（永楽帝）から賜ったので、もとの姓は馬であったことがはっきりした。マホメットの頭音をとって中国のイスラム教徒は馬姓が圧倒的に多い。また父の字とされている哈只は固有名詞でなく、メッカに巡礼した者に与えられる称号ハジの漢音訳とみられる。げんに鄭和は第七次航海では、自分は行かなかったが、団員のイスラム教徒七名をえらんで、メッカへ巡礼させている。

鄭和の遠征は大航海時代の前史にすれば、まことに華麗なものであったといえるだろう。『明史』鄭和伝によれば、南京の宝船廠でつくられた船隊は、それぞれが長さ四十四丈（約百五十メートル）はば十八丈（約六十二メートル）であったという。専門家の換算によれば、ほぼ現在の八千トン級の船に相当するそうだ。それが六十二隻つくられ、それに二万七千八百余人の将兵、水兵が乗り組んだのである。この数字については、史家のなかに疑いをはさむ人も多く、むしろ数字に誇張があるというほうが定説になっていた。ところが、一九五七年、南京郊外の宝船廠跡から出土した巨大な舵によって、『明史』鄭和伝の記述が、けっして誇大粉飾したものでないこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が証明されたのである。

九十年後に喜望峰をまわったヴァスコ・ダ・ガマの船隊は、その旗艦でさえ百二十トン級であった。鄭和の船にくらべて、信じられないほど小さかったのが、大航海時代の幕をあけた船なのだ。あるいは鄭和の船が信じられないほど大きかったというべきかもしれない。小さかったとはいえ、それによって新しい航路を発見したことが偉大であり、果敢な冒険精神があらわれている。鄭和船隊は巨船をならべて大洋をおし渡ったが、それは長いあいだ開拓された航路なのだ。五世紀のはじめ、僧法顕が陸路でインドへ渡ったが、帰りはスリランカからの海路をえらんでいる。大航海時代の千年も前だが、数百人の乗客をのせる便船が、ジャワと広州のあいだに、ほぼ定期的に運航されていた。主要港で船を乗りかえての航路であるが、早くから開発され、鄭和はそれを乗りかえなしの巨船でおし渡っただけである。ヴァスコ・ダ・ガマは、喜望峰の航路をみつけたが、その東方にはよく開発された海がひろがっていたことになる。

示威と交易

よく知られた航路を、巨船で行くのだから、冒険精神はそれほど目立たなかったというのは、鄭和にたいして失礼であるかもしれない。鄭和の航海にはガマの「キリスト教徒を得る」という

布教の信念も伴っていなかった。

鄭和の航海の目的については、さまざまなことが言われている。甥の建文帝から帝位を簒奪した永楽帝（成祖）が、自分の権威を諸外国にみせつける示威の目的があっただろう。また南京陥落のとき、宮殿内外で建文帝の遺骸がみつからなかったことから、海外逃亡の可能性があるとみて、大捜索隊をくり出したという説さえある。これなども信じ難いようだが、もはや建文帝の復活はありえないことを、内外に宣明するには役立ったにちがいない。巨船六十余隻の威容は、捜索そのものよりも威を示すことに効果があっただろう。

もちろん示威だけではない。中国の絹、生糸、陶磁器、薬材などを積み出し、胡椒、竜涎香、その他の香料、真珠、宝石、珊瑚、あるいは獅子、麒麟、縞馬、駝鳥など珍獣奇獣を仕入れて帰った。輸入品をみると、宮廷用のぜいたく品が多く、鄭和の船隊は一名「取宝船」と呼ばれたほどである。示威と交易であり、大航海時代のイベリア半島の人たちのような信仰の伝道という精神面の動機は含まれていなかったようだ。

大航海時代には旺盛な交易意欲があったが、その前史に鄭和の七回にわたる大交易があったことは、そこに継続性を認めざるを得ないとおもう。明が鄭和の大船隊を派遣したのも唐突のようにおもえるが、これも前史をもっている。唐代末期九世紀末に、広州に数万のアラビアはじめ外国の商人が来ている。宋元のときもそうであった。明は建国のとき「海禁」を国是とした。反体制派と外国勢力との結託をおそれたこともあろうが、私はそれまで個人貿易家が得ていた利益を、明が国営にしてそれを独占しようとしたのではないかという気がする。

マルコ・ポーロの時代

とすれば、まだその前史があるわけである。私たちに親しまれているのは、マルコ・ポーロで、彼が中国福建の泉州を発って、西に帰ったのは一二九〇年中頃といわれている。鄭和遠征より百余年前であり、ガマの喜望峰航路発見の二百年近く前のことになる。

五世紀の法顕がなんども乗りかえたように、東南アジアには、古くから局部航路があり、それをつないでいたのである。それがつなぎ合わさるようになったのは、ほかにも要因があろうが、イスラム商人の活躍を見おとしてはならないとおもう。広州にイスラム寺院の懐聖寺が創建されたのは宋代であろうという。インドのすくなからぬ部分、マレー半島、インドネシア諸島さらにはフィリピン諸島の一部までイスラム教がひろがっているのは、キリスト教徒をつくる、すなわち原住民の改宗をめざした大航海時代のヨーロッパ人よりも、はるかにイスラム教徒の布教が成功したといわねばならない。

大航海時代前史のアジアの東と西との航路は、十三世紀のマルコ・ポーロの時代は、やはり乗りかえがあったようだ。ポーロ一家は往きもペルシア湾のホルムズから船に乗ろうとしたが、その船があまりにもおんぼろだったので、おそれをなして陸路をとり、さびれつつあったシルクロ

ードを通った。帰りはモンゴル帝国の公務を帯びていたので、巨船に乗ることができた。だが、往きの場合も、ホルムズを出たイスラム船は、インドの先端まで行き、そこで巨大な中国船に乗りかえる予定であったといわれている。インドまで着きさえすればよいのだが、ポーロ一家はそれも覚束ないと判断したようだ。

元代の中国船の巨大さと堅牢さについては、マルコ・ポーロの『東方見聞録』にくわしく述べられている。たとえば、積荷の量についても、中国船がヨーロッパ船を凌駕しているといった比較がみえる。『東方見聞録』はヴェネツィアからコンスタンティノープルを経て西アジアから中国にはいり、前述したように海路で帰るまでの見聞をくわしく述べたものだが、都会の大きさを説明するときに、よく胡椒の消費量を挙げている。杭州市で毎日消費する胡椒は、おどろくなかれ、実に一荷二百二十三ポンド入りのもの四十三荷にものぼっている、と書かれているのがその例である。

点としての植民地

中国も胡椒を東南アジアから仕入れた。東南アジアには胡椒の取引のシステムがあったはずである。それまでの商慣習に従い、集荷、相場のとりきめ、積荷などのプロセスが、活潑に進行し

ていたであろう。新航路発見以後、そのルールはかなり変更を受けたのではないだろうか。最もおくれて参加した勢力として、ポルトガルはきわめて戦闘的であった。キリスト教布教という一面をもっていることが、かえって彼らをより傲慢にしたとも考えられる。野蛮な偶像崇拝者に、光明を与えるのだという気持ちがあり、それが商業権益確保と結びついて、植民地支配という悪名高い新しいシステムをつくり出した。

植民地支配といっても、それが面であるか点であるか、そのほかさまざまな形があるけれども、武力による支配であることは共通している。ポルトガルのアルブケルケは、一五一〇年にインドのゴアを占領した。ポルトガル兵士はゴアの略奪とイスラム教徒虐殺を許された。大航海時代がつくり出した植民地第一号であり、その創設のときから血ぬられたのである。商業基地であると同時に、カトリック布教の基地ともなり、日本に来たイエズス会のフランシスコ・ザビエルも、スペイン人であったが、ゴアにまずはいって、東方伝道にむかった。ポルトガルはゴアを占領した翌年、マラッカを占領している。ポルトガルの場合は、その後のマカオにいたるまで、つねに点的植民地の占領に終始した。香料の交易路の要点をつなぐ目的であろうが、面的植民地を維持するには、あまりにも本国の国力が脆弱であったからだろう。

香料とキリスト教と

ポルトガル、スペインなど、イベリア半島諸国につづいて、オランダ、フランス、イギリスなどの植民地進出があり、イギリスが最も成功したといえる。これら諸国は商業上の利益を追求することにもっぱらであり、信仰の伝道にはあまり熱意をもたなかった。カトリックとプロテスタントのちがいもあるだろうが、カトリックの非寛容性は、各地で摩擦をおこし、憎悪の的となったのである。イエズス会が最も成功したが、これは中国人の祖先崇拝と孔子崇拝とを許容したからであって、「典礼」問題となり、教皇庁は認めなかった。したがって、中国政府（明）も布教を禁止したのである。日本でも徳川幕府は切支丹禁制を厳重におこなった。

大航海時代は、ヴァスコ・ダ・ガマが述べたように、キリスト教徒と香料をもとめることにはじまったが、キリスト教徒を得ることには成功しなかった。香料に代表される商業上の利潤は大いに獲得したけれども、権益維持のために、武力を用い、植民地を各地につくることになったのである。アメリカの新大陸にもマヤ、インカなどの文明は存在したが、ヨーロッパ文明の水準にくらべるとはるかに低いものであった。だが、アジアにおいては、前述した造船術にもみられるように、当時のヨーロッパを越える文明が存在した。厳密な意味における「植民」は新世界のアメリカにおこなわれたが、アジアではヨーロッパからの大量移住はなく、武装した少数者の支配という形をとった。この体制が崩れるのは二十世紀になってからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com